

哲学的・神学的・文学的・歴史的側面から多角的に、かつ影響史的連関において統一的に究明した力作である。著者がくり返し神秘主義の核心をなす根本問題に立ち還り、新たな視点から解釈を試みる姿勢には、かれの実存をかけた情熱が感ぜられる。文献は非常に多岐に亙り、かつ徹底的に熟考されている。しかし著者自身基本的にドイツ文学者であるので、原典は中高ドイツ語によるものが主である。したがって、ドイツ神秘主義をラテン語の文献を通じて、中世の神学や哲学との関連で捉えることは必ずしも十分に行われてはいない。これはわれわれに残された今後の課題であると思われる。

---

上智大学中世思想研究所編

『キリスト教的プラトン主義』

創文社，昭和60年，vi+296+9頁。

大 出 哲

本書の書評は不要である。なぜなら、この主題は、中世思想研究者の間で久しく渴望されていたものであり、すでに多くの人の座右の書となっているからである。また、本書の書評は不可能である。なぜなら、執筆者 P. ネメシギ、谷隆一郎、F. ベレス、熊田陽一郎、R. L. シロニス、大谷啓治、坂口ふみ、K. リーゼンフーバー、門脇佳吉、山下一道の諸氏は、力量において評者をはるかに凌ぐからであり、とりあげられる思想家は、オリゲネス、ニュッサのグレゴリオス、アウグスティヌス、偽ディオニュシオス・アレオパギテース、スコトゥス・エリウゲナ、コンシュのギヨーム、ボナヴェントゥラ、トマス・アクィナス、エックハルト、クザーヌスと、教父時代からルネサンス初期にまでわたり、評者の能力以上のものを要求するからである。にもかかわらず書かねばならない。O quam absurdum!

「キリスト教的思想家たちによってプラトン主義の精神はキリスト教信仰にふさわしい哲学的表現形態であるとみなされ、そのためキリスト教の哲学的・神学的解釈に(新)プラトン主義思想との融合からの影響が強く及ぼされるにいたった」(序言p. 2)。した

がって、キリスト教的思想家のだれかを取り上げて「〇〇における新プラトン主義」と銘打てば、当らずとも遠からずという現象が起こる。この安易さに門脇氏が警鐘を打つ。「どこまで新プラトン主義か」。このことに十分な配慮がなされていることは、一読すれば分かっていただけると思う。

P. ネメシギ氏の論題は『オリゲネスにおけるプラトン主義』である。まず中期プラトン派の神概念の二つの根本要素が挙げられる。それは「超越」と「善良さ」である。神は、プラトンがイデアの特徴として認めた性質の全部を持っており、「万物の父」として万物を全く超越する。この神は善であるから、自分の善をできる限り他者に与える。オリゲネスの神は多くの点で中期プラトン主義の神に似ている。が、神の意志と能力による無からの創造を説く点で、ギリシア思想とたもとを分かち。だがこれはオリゲネスの神概念の神髄ではない。神髄は、人を愛する人格的な善良さなのであり、人間が滅びるのを見るときに同情の涙を流し、人間が救いを見いだすのを見るときに喜ぶ善良さなのである。愛こそがギリシア的な神概念を突破するものなのである。愛するがゆえに神は人間を叱責し懲らしめる。しかし、自由意志に反して人間を駆り立てることはしない。したがって、人間は最後の審判のとき責任を取らねばならぬ。教育思想における自由意志の強調は、ギリシア思想に見られないものである。

谷氏の論題は『選択と自己——ニュッサのグレゴリオスにおける「プロアイレシス」と「アレテー」』である。「我々は固有のプロアイレシスに抛り、自己が意志する方へと自己形成してゆく」というグレゴリオスの言葉を導入し、プロアイレシスの意味付けをグレゴリオスの言葉に即して追究する。神の顕現は、それにまみえる者自身の根本的な変容をもたらす。これを自由な扱ひ（プロアイレシス）によって受け容れる者は、自己よりも更に大なる者に自ら成りゆく。この「自己よりも大なる者と成りゆく」という絶えざる生成として神の名称「存在」が現出してくる。ところで、何であれ快の像を描くこと自身、何らか先験的に善に触れているはずである。したがって、更に大なる者に成るという自己自身の扱ひは、善に根拠付けられているはずである。こうしてプロアイレシスの意味が明らかになり、アレテーが定義される。「人間の本性の完成された姿（アレテー）とは、善により多く与えることを絶えず意志し志向することである」。

F. ペレス氏の論題は『アウグスティヌスのイデア論』である。『ティマイオス』によれば、万物の原型は、デミウルゴスが眺めるイデアでもあり、デミウルゴスがもって

いる善自体でもある。その約2000年後スアレスは、範型因の問題について徹底的な検討を行い、外にある範型と心に内在する範型とを区別し、後者のみが厳密な意味の範型因であると言う。スアレスの徹底的な検討の背後には、それを可能にした長い歴史がある。プラトンのアイデアを明白に神の思惟内容とする解釈は、すでにフィロンやセネカに見いだされるが、後世に深い影響を与えたのは何と言ってもアウグスティヌスである。氏の論題はこうして導き出され、『83の諸問題』『神の国』『創世記逐字解』『再考録』のおびたしい引用によってアウグスティヌスのアイデア論が構築される。

熊田氏の論題は『神名としての最高類概念——偽ディオニュシオス・アレオパギテースにおけるプラトン主義の一考察』である。すべての存在と認識を越えた善が、王としての権威をもって、認識に関わる仕方では自己を開示する。この開示に照らされて我々は神の名を形成するのだが、その中で大・小、同・異、類似・非類似、静・動の四つの概念対が考察の対象として選ばれる。なぜなら、これらの概念対はプラトンの『パルメニデス』と『ソピステス』に源をもち、新プラトン派を介してディオニュシオスに受け容れられたからである。神名としての四つの概念対が詳細に検討された後、明快に結語される。(1) 大にして小、同にして異、類似にして不類似、静にして動という対立項の一致としての神名は、新プラトン派のヌースの含むパラドックスであり、存在者の分節のために働く。(2) 大にして大に非ず、小にして小に非ず、同にして同に非ず、異にして異に非ず等の神名にかかわる矛盾弁証法は、新プラトン派の一者がもつ超越性を表現する。

R. L. シロニス氏の論題は『スコトゥス・エリウゲナの認識論におけるプラトン主義的性格』である。スコトゥス・エリウゲナの新プラトン主義的思想は、その源流から直接にはなく、初期キリスト教著作者から間接的に汲まれたものである。『自然区分論』におけるその認識論的側面に限って論究がなされる。まず、人間の靈魂の三つの働き、すなわち、悟性、理性、内的感覚が詳述され、次に、悟性→理性→内的感覚と下降し、さらにこの逆を上昇する靈魂の運動が述べられる。最後に、「神についての知と無知」が論じられる。悟性は自然本性的な志向によって特別な仕方では神に達しうるが、新プラトン主義的な脱魂状態になるわけではない。人間は、神の示現を介して神の存在を認識しうるが、神の何であるかを認識しえない。このことは否定神学の強調へとつながる。まさに新プラトン主義的要素である。

大谷氏の論題は『コンシュのギョームのティマイオス注釈』である。まず、『創世記』

冒頭へのティエリーの注釈と『ティマイオス』27Cのカルキディウス訳へのギョームの注釈を並置して、両者共に創造主としての神の認識および崇敬という有用性をもって示し、シャルトル学派における両注釈の驚くべき結合現象を提示する。次に、『ティマイオス』27C—29Dについてのコンフォードの注釈と比較してギョームの「かなり強引なキリスト教的解釈」をあらわにする。「宇宙の製作者すなわち創造主」の項では、28A—30Cに出てくる *δημιουργός, ποιητής, πατήρ, συνιστάς* に関わるギョームの注釈を検討し、カルキディウスが大体 *opifex* と訳しているものをギョームが創造主と解し、この創造主 *Creator* が質料のないところから創造したと解した、と結論する。さらに宇宙の始まりの問題が論じられ、最後に、プラトン哲学に反キリスト教的なものが見出された場合、そこに *integumentum* (覆い) におおわれた深い哲学を見出そうと努力する例が示されて終わる。

坂口女史の論題は『ボナヴェントゥラにおけるプラトン主義』である。資料は、ボナヴェントゥラが明白にプラトンないしプラトニキの名をあげている箇所だけに限定される。『命題集注解』を中心とする前期著作から世界の原因と魂の不死についての論述が取り上げられ、この段階においてはプラトンがアリストテレスによって凌駕されていた、と結論される。しかし、『万人の唯一の教師たるキリスト』においては、「哲学者たちの間ではプラトンに知恵の言葉が、アリストテレスには知識の言葉が与えられていたように見える」とプラトンが上位に置かれる。そして最晩年の『六日の業についての講義』においては、「神のロゴスであることにより超越的一者と事物のイデア的媒介者」と言われて、プラトンのイデアはキリストに変わる。この評価の変化の時代的背景を探ることも女史は忘れない。最後に、この思想家においては、超脱に至るフランシスコの苦闘はディオニュシオスの否定による神への上昇の具現であったことが付け加えられなければならない。

K. リーゼンフーバー氏の論題は『トマス・アクィナスにおける分有』である。まず、トマスのプラトン主義的資料の詳細を提示し、その遺産の中から、トマスの思想のプラトンの・新プラトン主義的側面を理解するための鍵として分有の概念を取り出す。次に、分有概念のさまざまな適用例を挙げ、それが可能なのは分有概念が構造的な概念として理解されているからであるとし、(1) 分有の一般存在論的な構造を明らかにしたあとで、(2) 神の諸名称に反映している神の本質こそが分有構造の根元であること、およ

び、神と被造物との関係のうちに分有構造がどのように実現されているかを探究する。

(1) 分有の本質は、存在者が自らの内実や完全性を、その起源から限定された仕方でも所有する、という点にある。これは、分有者の側にのみ成り立つ純然たる受容関係であって、起源は分有者との関係にかかわらず自存している。(2) プラトンのイデア論に対するトマス批判を検討したのち、「神の名としての存在・善・一・真」の分有構造の根元性をプラトン・新プラトン主義のそれと比較しながら詳論し、さらに、善と目的因性、真と範型因性、存在と作用因性、一と目的における共同性の問題を詳論する。

門脇氏の論題は『形而上学的神秘家たるエックハルト』である。「形而上学的」および「神秘家」の概念規定の後、新プラトン主義的特徴が顕著な彼の思惟方法に的を絞って論究する。エックハルトは形相的流出の観点から物事を考察することを好む。これは重層的思惟方法となって現れる。この事情は、「善なる人は、善である限り、善性とは一である」という命題について詳論される。形相的流出には、(1) 芸術家からの芸術作品の流出と神からの被造物の発出のような類比的なもの、(2) 三位のペルソナの発出のような一義的なものがある。彼は、芸術作品を見ながら共感によって芸術家の生命の躍動を感じ取る段階から上昇して、ついにはすべての業が根源のうちにあると観る立場に至り、さらに、御父からの御子の発出、御言葉による万物の創造、御子を通して行われる人類への神の自己譲与を観る。

山下氏の論題は『クザーヌスにおける神理解と世界の構造』である。この論文の意図は、(1) 一切の対立の以前の一性のうちに全ての根源を求めるという点において、クザーヌスの哲学がプラトン哲学の伝統のうちにあること、および、(2) 世界の在り方を「関係性」として把握することによって、「実体性」から「関係性」への世界理解の移行行きの中にクザーヌス哲学の中世から近世への過渡的性格を明らかにすること、である。神についての前半においては、知ある無知における神理解が、「対立物の一致」の概念のもとで、認識成立以前への、一切の対立の以前への超越として生起すること、さらに、この超越が、内在的超越として一切の事物と対立するものでないことが明らかにされる。世界についての後半においては、前述の「神の超越即内在」という在り方が「包含——展開」という関係概念のもとに明らかにされる。そこではクザーヌスに独特な「縮限」contractio の概念が主役を演ずる。